

開催日 平成三十年十一月十日（土）
会場 広島大学 東千田キャンパス

日本道教学会 第六十九回大会要項

日本道教学会

(1)

日本道教学会第六十九回大会案内

拝啓 仲秋の候 ますますご清祥のことと拝察申し上げます。

本学会第六十九回大会を来たる十一月十日（土）に広島大学において開催いたしますので、
ご参加くださいますようお願い申し上げます。

ご参加の方は、同封の郵便振替票をご使用になり、必要事項をご記入の上、十月三十一日（水）
までに参加費等をお振込ください。また振替受領証は当日ご持参ください。

敬具

平成三十年十月十日

(2)

日本道教学会 会長 丸山 宏
第六十九回大会準備委員長 有馬 卓也

会員各位

横組頁

(3)

第六十九回大会日程次第

受付(十時)

午前の部

開会式(十時半～十時四五分)

挨拶

日本道教学会会長

広島大学文学研究科長

丸山 宏

久保田啓一

研究発表(十時四十五分～十二時十五分)

古代中国における厲鬼觀念の展開について―疫病との関係を中心に―

董 伊莎(関西大学)

司会 有馬 卓也(広島大学)

現存する呪術治療の様相―江蘇省中部沿海の「鬼交」をめぐる―

孫 瑾(広島大学)

司会 三浦 國雄(四川大学)

(4)

古靈宝經に見える經典觀について―「元始旧經」を中心に―

林 佳恵 (日本道教学会会員)
司会 山田 利明 (日本道教学会会員)

休憩 (十二時十五分～十三時半)

記念写真撮影 昼食

午後の部

研究発表 (十三時半～十五時半)

尹志平『清和真人北遊語録』における『道德經』受容について

日比野晋也 (関西大学)
司会 森 由利亞 (早稲田大学)

明末江南士大夫の宗教生活

石野 一晴 (慶応義塾大学)
司会 三浦 秀一 (東北大学)

現代における養生実践から見る伝統的道教煉養の新しい形態をめぐって

黄 啓文 (政治大学)
司会 野村 英登 (二松學舎大学)

信仰における図像とその継承

―敦煌古墓画磚と莫高窟壁画における天、山と西王母の描写を中心として―

荒見 泰史 (広島大学)
司会 遊佐 昇 (明海大学)

総会 (十五時四十五分～十八時)

懇親会 (十八時～二十時)

研究発表要旨

古代中国における厲鬼觀念の展開について―疫病との関係を中心に―

関西大学 董 伊莎

厲鬼というのは後嗣のない、凶死などの原因によって災い、特に疫病をもたらす鬼神とされている。しかし、厲鬼は祖先や一般死者及び精怪（妖怪や靈的存在）の場合もあり、多様なニュアンスが見られる。だが、それぞれの意味においてその思想的由来がどのような変容や展開を経て今の一般化した概念に至っているのかについてはまだ詳しく検討されていない。特に、疫病をもたらす厲鬼の場合、人鬼の面が漢末まで稀薄だったことは十分認識されていない。

現存文献における厲祭については『礼記』祭法篇がよく取り上げられるが、そこに見える七祀・五祀における厲はあくまで祖先祭祀の範囲で捉えられ、神格の善悪は強調されていない。しかも、後に儒教的祭祀対象における徳の価値標準に従って厲が再定義され、多くの礼典資料で祭祀すべき人鬼が祖先や「民に功烈有る」人に限定されるようになる」と一部の悪しき死者が祭祀から排除された。一方、祖先祭祀と関係なく伯有や杜伯など有名な怨魂は復讐者として特定の人を害するとされ、子産の説によって厲鬼として広く知られている。ところが、睡虎地秦簡「日書」甲種の「詰」篇には実体を持つ鬼が疫病を引き起こす内

(7)

容が記されているが、感染の範囲はかなり限られ、鬼の性格も人鬼より精怪に近い。また、驅疫の儼儀で追い払う対象には精怪や神などさまざまなものがあることから見れば、厲鬼の選定には疫病を引き起こす力を持つという効用面も認められると思われる。このように、厲鬼という概念は実に多岐な由来があり、それぞれの視点で捉えられていたのである。特に後嗣のない人鬼の厲と疫病をもたらす厲は根本的に共通するとは言い難い。

漢末以降になると、「敗軍の将」の霊が疫病を引き起こすとされ、厲鬼信仰が新しい展開を見せたことについてはすでに先学指摘がある。その原因は巫祝信仰の展開のほか、筆者は災異思想の成立と展開もその一つの条件ではなかったかと考えている。それは、天譴説において災異の発生は冤罪・冤死の人によるという考えがあるからで、怨魂と疫病は統治者の過失とそこからたらされた罰という一種の因果関係になる。同時に、自然感応の面において死者の怨恨は陰陽の気のバランスが崩れることを通じて災異を引き起こすという気の構造論は、疫病が陰陽の気の乱れによって引き起こされるという考えと重なる。こうして、恨みを持つ人鬼が大規模な疫病を引き起こす力を得ることが可能になる。そのうえ、疫病が多発した漢末には疫病への関心が高まり、民間宗教者がそうしたブームに拍車をかけ、ついに厲鬼信仰に新展開が見られたと考えられる。

こうしたプロセスを経て生まれた新たな厲鬼はある種強い力を手に入れることになり、これは後に瘟神など多様な神格に展開する条件の一つになったとも思われる。

(8)

現存する呪術治療の様相―江蘇省中部沿海の「鬼交」をめぐって

広島大学 孫 瑾

魏晋南北朝の医学文献に「鬼交」という病気は見られる。「鬼交」とは鬼と交わるということを指し、そう診断された患者はみな同質の症状を有している。例えばいきなり歌ったり泣いたり笑ったり、幽霊などを見たというような一言を言ったり、或いは誰かと話しているように独り言を言ったりするというもので、心神喪失症と呼ばれるものに近い。「鬼交」の病因の解釈はその病名の通り鬼の祟りとする。一方で、合理的な医学理論も受け入れられ、撰生のバランスを失うことを病因の一側面とされている。それに応じて治療方法も医学系と呪術系の両方を含む。また当時の道教文化に影響を受けつつ、「鬼交」は隋・唐の医学文献において「注」という病気に繋がるようになり、多くの場合祖先の祟りと共に「注」の症状とされている。金・元時代になってから中国伝統医学が巫術から分離し、「鬼交」の治療もおおよそ呪術から離れるようになった。

(9)

金・元以降の医学文献においては呪術治療がほとんど見られなくなり、隋・唐以前とは大きな断層が存在している。しかしそれが歴史から消えてしまったというわけでもない。「鬼交」を例として、中国江蘇省の中部沿海の村に近年でもこういった病気、またそれに対する呪術治療が存している。当地の民衆は病院に行っても治らない病気があれば、巫女の所に向かいて病因を問い仙薬を求める。文献記述と同じく、当地

の「鬼交」もほとんどの場合女性に起こる。その病因について一番典型的なのは、死んだ男の霊が女性に憑依してその女性の口によって「この女と夫婦になる」と話す、というものである。中国民俗的調査にはたまたま「神と交わる」例が見られるが、このような「死んだ人と交わる」実例はあまりにも珍しい。これら情報は中国民俗文化的研究、特に呪術治療を通して中国医学思想を闡明するという課題にとって非常に貴重であると考えられる。

中国民俗思想に関する先行研究では、呪術治療を主な対象とするものが少ない。また、江蘇省中部沿海に対する研究はほぼ行われていない状態である。発表者はこの地域への呪術治療を中心とする調査の必要性を感じ、今年5月に初歩的なフィールドワークを実施した。今回はその調査によって得られた情報を分析して発表する一方、古代医学文献における「鬼交」の呪術治療の記述と対照して、鬼神病因論・呪術治療の歴史の変遷を論じてみる。

(10)

古靈宝經に見える經典觀について——「元始旧經」を中心に——

日本道教学会会員 林 佳恵

周知のように、劉宋の道士陸修静(406～477)は、その著述「靈寶經目序」(『雲笈七籤』(HY1026)卷四)や「太上洞玄靈寶授度儀表」(HY528)の中で、靈宝經の神話伝承的「歴史」の記述を通して明確な靈宝經觀を示している。ここでは、「元始旧經」は、元始天尊所説の「十部三十六帙」の經であり、六天の支配が始まると大羅天に還るが、劉宋の世に至ると、その瑞兆として地上に出現し始めたことを述べている。しかし、たとえ古靈宝經の内容を承け、或はそこから着想を得ているにせよ、それは陸修静の經典觀であって、古靈宝經自体の經典觀ではない。古靈宝經の作者は、自分が編む經典をどの様なものとして認識していたのか?換言すれば、古靈宝經はいかなる經典觀のもとで作られたのか?これは、古靈宝經の宗教活動としての道教史上に於ける位置付けにも関わる問題であり、議論する余地はあると考える。但し、その際には、陸修静の視点を離れて古靈宝經を眺める必要がある。敦煌文書(ペリオ2861.2+ペリオ2256)中に発見された、古靈宝經の目録である敦煌本「靈宝經目録」で「元始旧經」に分類されている經典には、天界の紫微宮に秘蔵される「經」や、元始天尊が敷演した「十部妙經」に言及するものがある。それらの事柄は、前述の陸修静の「元始旧經」に関する記述に相似して見える為、陸修静の靈宝經觀に沿う形で解釈・理解される向きもあるようである。

本報告では、古靈宝經に内在する經典觀を理解する為の基礎的作業として、主に「元始旧經」に散見する紫微宮秘蔵の「經」と「十部妙經」を取り上げ、これらを經典の記述から考察し、少なくとも敦煌本「靈宝經目録」で「元始旧經」に分類されている經典の一部には、古靈宝經独自の視点が有り、そこに窺える經典觀は、陸修静が「元始旧經」に対して持つ經典觀とは、完全には同じでないことを明らかにしたいと考える。

本発表で取り上げる『清和真人北遊語録』は丘処機を継いで全真教を率いた尹志平(1169~1251)の語をまとめたものである。尹志平は最初、七真の一人馬丹陽に弟子入りし、ついで劉処玄に師事したあと、明昌2年(1191)に丘処機に師事した。これ以降は丘処機が教導を行っていたようである。尹志平は丘処機がチンギス・カンの招聘に応じた西遊を行うきっかけを作った人物であり、丘処機亡き後の教団を率い、教団組織を整えた七真について有力な道士であった。

『清和真人北遊語録』は弟子の問いに尹志平が答える形で展開される。その中には丘処機のみならず、王重陽や馬丹陽の言葉の引用もあり、当時の全真教においてどのような形で教理が伝えられていたのかを知る上で欠かすことのできない史料である。また注目すべき点として、尹志平が『道德経』の講義も行っていたことが挙げられる。全真教には禅の不立文字的な面が見られ、一般に經典への執着は戒められていた。しかし、例外の經典もあり、『道德経』はその一つとして王重陽時代から重視されていた。劉処玄は自ら『道德経』の注を著していたと伝えられており、重要な經典であったことが窺える。彼らは特に養生思想を旨とする「河上公注」を重視していた。馬丹陽もその流れを受け継いでおり、尹志平も「河上公注」については、「修行の人聴受し得て用最も多き者は、河上公に如くは莫し」といい、また「弟子経中の「出

生入死之義」を問う。師曰く「河上公注」を取るべし」とあるように、これを高く評価していたことがわかる。尹志平は「河上公注」以外にも宋の徽宗注や蘇軾注など様々な注を取り上げ、弟子たちに講義している。全『巻』で構成される『清和真人北遊語録』は、そのうち巻三と巻四の二巻にわたって『道德経』の講義であることを見ても、尹志平の『道德経』への傾倒が相当なものであったことが窺えるだろう。

全真教の布教は七真が各地に散らばることによって行われていた。彼らにはまたそれぞれ弟子がおり、各人が王重陽の教えをさまざまな形で伝えていた。これは、教義としてのまとまりが取れていなかったともいえる。『長春真人西遊記』によれば、丘処機は死去が近づくさなか、全真教の教義を整理し撰述しようと考えていたという。尹志平が『道德経』の講義を行い、王重陽らの言葉も交えて弟子たちに説法を行ったのは、ある意味で丘処機の意思を継ぎ、教義を統一しようとしていたのではないかと考えられる。

そこで本発表では『清和真人北遊語録』に見られる『道德経』の講義内容と「河上公注」の取り上げ方を比較分析し、全真教における『道德経』受容の様相がどのようなものであったのかについて分析を試みたい。加えて徽宗注や蘇軾注も視野に入れ、全真教と宋代道教との思想的流れについても触れみたい。

士大夫は道教と密接不可分の関係にあったが、とりわけ明末においてその傾向は顕著に見られる。思想的には三教合一が唱えられ、道士と士大夫層との交流も日常的に行われた。ときには士大夫自身が扶乩に関わることも珍しくなかった。蔵書家の書棚には道教関係の書物が積み上げられ、仏教関係書籍の数を上回ることもしばしばであった。王世貞の広めた曇陽大師の昇仙譚に人々が熱狂したことからわかるように、明末社会には道教思想の影響が至るところに見られた。このような事実は夙に指摘されてきていたが、従来の研究は概説的なものが多く、個別の士大夫に注目するものではなかった。

そこで報告者が注目するのは屠隆（一五四三—一六〇五）である。浙江鄞縣の出身である彼は文学者、戯曲家として有名であるが、三教合一を唱え仏教、道教に関する議論を盛んに行ったことでも知られている。彼の人脈は非常に広く、王世貞・王錫爵・汪道昆・范欽・沈一貫など時の名士たちと書簡を交わし、その話題は曇陽など道教に関わる話題にも及んだ。本報告は、これら屠隆の文集中に見られる文章を検討し、仏道修行に励み曇陽大師への弟子入りをした屠隆の宗教生活を統合的にとらえ、彼を軸に明末社会における士大夫の宗教生活の一端を明らかにすることを試みる。

道家の養生法の実践は、内丹学の発展の歴史的観点の中で、清の末期から中華民国初期にかけての時代は、陳撊寧がこの領域の代表を担っていた。陳撊寧は煉養技術を用いた伝統的な手法を、科学的な角度と組み合わせ解釈し、さらに当時のマスメディアを通じて、自らの論述を公開し、それまで世に知られていなかった修煉の内容を広め、当時の社会の注目を集めた。その後、新中国はこの修煉を基礎から発展させていき、1990年代には「氣功熱」のブームを巻き起こした。そしてこのブームは世界中の学者たちの注目を集め広く考察された。では、21世紀になった現在ではどうなったのだろうか。

筆者は、2015年1月27日から北京、上海、台湾で養生文化を広め、煉養を実践している団体についてのフィールド調査を重ねてきた。三年に渡る調査を経て、華人社会の健康を追求する「養生実践」という概念が、「陳撊寧仙学」と「氣功熱」を経て、推し広められながら現代化した過程を、本研究では以下のいくつかの側面に分けて説明を行う。初めの側面では、伝統文化に対する理解の強調、つまり中医（中国の伝統的医学）と道家の養生理念の思想から出発し、フィールド調査の背景にある文化のルーツと関連性を掘り下げ、その次に、現代西洋医学を併用し、「養生実践」の有効性について検証を行う。つまり、フィールド調査の過程の中で、煉養と関連しているケースの医療効果の有無を検証する。そして最後に、筆

者は更なる試みとして、全体的なフィールド調査の過程を通して、この、「養生実践」がどんな宗教的な意味合いを持つかを研究した。

煉養を實踐している団体の修煉内容は、伝統文化の理解を深める上で、4つの要点に分けることができる。一つ目は経典（中国の古い書物）という課程の講述である。例えば黄帝内経、道德経、心経、菜根譚や王陽明の心学といったものである。二つ目は、道德経や心経を中心とした経典を書き写すことによる経典瞑想。三つ目は、道家内丹の秘訣及び呼吸の主な意味を含む、静功の練習。そして最後は、動功の練習である。道家の太極拳、華佗五禽戯、さらに達摩易筋経の動きの要点を組み合わせ、動功の4式を習得する。筆者は以上に述べた4部分に内在する道家と中医文化におけるルーツ及び関連性について述べていく。

伝統文化に対する理解を強調したところで、次の側面では、「医学的効果」について説明していく。主に西洋医学を併用し、病気を患っている煉養者たちが医療機関を通して健康診断を行う際に、医療的臨床データを提供し、煉養者の「養生実践」を行う前後を比較し、「養生実践」が修煉者自身に実際どのような効果があるのかを検証する。そして科学臨床医療データと「養生実践」の効果が結合しているということを証明した上で、「養生実践」の現代化についての理念をさらに説明する。（ここでは高血圧及び肥満患者を対象としたケースを用いる）

最後に、全体のフィールド調査の実践過程を通して、「養生実践」がどんな宗教的意味合いを持って新しく形作られたかを述べていく。本研究の研究対象となった煉養団体が言うには、個人であってもグループ全体であっても、健康を追求するという観念が共通している。そして健康を追求する中で人々は文化信

念を感得し、その感得が人々の動静功法の修養を繰り返し実践する動力となっている。その修養過程における心身の「儀式性」及び個人とグループ間における実質的そして仮想的な場所での施術により生み出された「重複性」と「実践性」を持つ特質、さらに健康追求という日常的形態の宗教的「現象」、これらの要素こそが、現代を生きる華人が形作る宗教性の新形態である。

キーワード…養生実践、宗教性、中医、道教、内丹

信仰における図像とその継承

—敦煌古墓画磚と莫高窟壁画における天、山と西王母の描写を中心として—

広島大学 荒見 泰史

シンボリックな図像が、信仰において重要な意味を持つことは言うまでもない。

図像は、信仰の場の視覚的要素を担い、心の奥底に沁みついてゆくものである。信仰の場に限らず、音や香りを含めた五感の中で視覚は強い刺激をもつ。こうした感覚情報は、言語、文字による知覚情報と結びつき、信仰の場をより荘厳なものとする重要な要素となる。

そうした図像の中には、時代を越え、さらには信仰、宗教を越えて引き継がれるものがある。例えば、「卍」などはその代表的な図像である。卍は「万」とも訳され、『長阿含経』中に仏の様相を表して「胸有万字」ともあることから仏像の胸の部分に「卍」が表されることも多い。かくて仏教の象徴として用いられるようになり、日本では、地図上の寺院を表す記号としても卍が使われている。しかし、この卍の使用は仏教に限られない。新石器時代ころからインド、メソポタミアなど、様々な地域で見られ、吉祥あるいは平和のシンボルとされ、宗教を越えて様々な宗教遺跡などからこの類型が見られるという。

また、仏像のイメージの中では座像というスタイルも人々の印象には強く残るものである。しかも椅子に座る「椅坐形」ではなく、ほぼ「胡座」が思い浮かべられるだろう。しかし、この胡坐の像という類型

は、仏教中国伝来早期の後漢の仏像に見られる前に、すでに前漢時代の西王母にも見られ、しかもものに仏教の座像が現れる地域と重なることから、仏の座像の形状が西王母信仰の影響を受けていると考えられると言う。

仏像によく見られる光背なども、様々な信仰、宗教で用いられる。もともと神仏や聖人など、偉大な徳や聖なる力を持つものが光を発すると形容されるところに始まるものであるが、早くはゾロアスター教のミスラ神にすでにそのような表現が見られ、先の西王母坐像にも光背が描かれている。また、キリスト教の聖人の背景に同様の光背が描かれることはよく知られている。

こうした類似性は、偶然の一致もあるかもしれないが、主として①異なる信仰が一時代一地域に共存したために融合し拡散する場合、②もとの信仰が新たな信仰に飲み込まれ受け継がれていく場合、など様々な信仰の融合によってこのような図像の継承が起こると考えられる。

本発表では、敦煌資料を中心として、天界の描写、天界を表現するために描かれる太陽、月、山、そして西王母の図像について紹介し、こうした信仰を越えた継承について考えてみたい。敦煌には仏教浸透以前と見られる時代から宋元時代までの豊富な図像資料及び文献資料が残され、そこには様々な信仰とその融合の様相が反映されており、こうした問題を考える上で大変興味深い資料と思われる。

横組頁

(21)

.....
切り取ってご利用下さい
.....

出張依頼状

日本道教学会第六十九回大会を、来たる十一月十日（土）に広島大学東千田キャンパスにおいて開催いたしますので、貴学
ご派遣いただきたく、依頼申し上げます。
氏を

平成三十年十月五日

日本道教学会 会長 丸山 卓也
第六十九回大会準備委員長 有馬 卓也

様

(22)

日本道教学会第六十九回大会要項

発行日 平成三十年十月五日

発行者 日本道教学会第六十九回大会準備委員会

委員長 有馬 卓也

〒七三九―八五二二 東広島市鏡山一―一―三

広島大学文学部 有馬卓也研究室内

電話 ○八二―四二四―六六二五